

## フィリピンにおける子どもの労働と教育開発に関する研究

The Influence of Child Labor on the Educational Achievement and Quality of Life of Children: A Case Study of the Philippines

お茶の水女子大学大学院・人間文化創成科学研究科・人間発達科学専攻  
教育科学コース・博士前期課程2年  
仲手川ひとみ

### ■Abstract

Human security seeks to improve the development ability of all people through universal primary completion. Child labor has been recognized as one of the factors for school dropout. The high rate of dropout is a particularly serious problem in the Philippines.

The study aimed to answer the following questions: (1) Are there any differences in educational achievement or the quality of life (QOL) among children employed in various areas or types of work? (2) How are the behavior and health conditions of children affected if they start working? We adopted questionnaires and interviews as the methods of study. Forty-two children in Calahunan and forty children in Oton answered questionnaires about their school and working conditions or QOL. Further, seven parents of working children and three elementary school teachers in each area were interviewed.

The findings revealed that the effects of working on QOL differed across the areas where working children lived. However, in both areas, working had a negative effect on children's relationships with friends. Moreover, children became sick easily after they started working. Further, their attendance decreased, their grades declined, and they had less time to complete homework. These negative influences on academic achievement possibly discouraged children from attending school. There were also differences between parents' attitudes toward their children's employment. Some parents in Calahunan did not consider work to be beneficial for children's development, others in Oton believed that working could serve as good training for children to become responsible in the future.

To enable children to continue attending school, it is important not only to reduce their burden but also to maintain the quality of education. School should not inconvenience children regardless of whether or not they are working. Therefore, teachers must support the school life of working children. Further, parents'

attitude toward their children's employment or schooling is an important factor influencing children's decisions. Poor families require not only economic support but also opportunities to realize the value of school education.

■調査期間：平成23年9月17日（月）～9月30日（日）

#### ■調査目的

人間の安全保障は、基礎教育の完全普及により全ての人々の能力を強化することをアプローチの中心に据えている。さらに個人の能力強化を行うにあたり、国家づくりの基盤となるコミュニティ・レベルでの取り組みを特に重視している。子どもを教育から阻害する要因の一つに、児童労働が挙げられる。子どもの継続的な教育を支えるためには、児童労働の実態と労働が子どもの生活や就学に及ぼしている影響を明らかにし、地域の社会的・文化的背景を考慮した教育のあり方を考える必要がある。そこで本研究では、児童労働が子どもの高い中退率の原因と見なされているフィリピンを対象とし、児童労働が子どもの生活や教育に与えている影響を明らかにすることを目的とする。

フィリピンは初等教育の就学率が高い一方で中退率の高さが問題視されている国であるが、児童労働は子どもの就学を妨げる要因の一つである。経済活動や家庭内労働に従事する児童は時間的・体力的に通学することが困難になり、一度就学の機会を獲得できてもドロップアウトしてしまう可能性が高くなる。すなわち、教育へのアクセスがほぼ達成されているフィリピンにおいて、児童が労働をせずに学校に通える社会の実現は継続的な就学を支える重要な基盤となると考える。

多くの研究が身体的・精神的なダメージや就学の阻害といった児童労働が子どもに与える負の影響を主張しているが、一方で子どもが働くことを肯定的に見る研究もある。労働は児童の自尊心を高める、あるいは労働を責任ある市民になるためのトレーニングと捉えていることから、子どもの労働に価値を置いている地域もあるといわれている。草の根の人々の主体性を尊重し地域に根ざした持続可能な発展を達成するためには、外部の価値基準での判断ではなく、現地の社会的・文化的な文脈の中で教育のあり方を検討することが求められる。

以上のことから、児童労働が子どもの生活の質および教育達成に与えている影響を実証的に明らかにし、コミュニティに根付いている子どもの労働と教育に対する価値観を記述することで、現地の実情に即した働く子どもの生活支援・教育支援に寄与したいと考えている。

#### ■調査概要・方法

フィリピン・イロイロ州のイロイロ市カラフナン地区のごみ山周辺およびオトン町タグバック・サー地区の農村を調査地とし、7～13歳の労働児童に対してはアンケートを、労

働児童の保護者および小学校教員に対してはインタビューを実施した。アンケートはカラフナン地区 42 名、オトン町 40 名、計 82 名の労働児童に実施した。インタビューは各地区保護者 7 名、小学校教員 3 名に実施した。小学校での調査は、カラフナン地区では Feliciano Java Kelly Primary School、オトン町では Tag-bac Sur Elementary School で実施した。

労働児童に実施したアンケートでは、子どもの就学状況や中退・留年経験をはじめ、労働の種類や労働日数・時間、身体的重労働や家事労働について質問した。また WHO の QOL 尺度「Kid-KINDL」の項目を参考に、身体的健康・情緒的健康・自尊感情・家族・友だち・学校生活の 6 領域から成る QOL についても確認した。保護者に対するインタビューでは、子どもが労働をすることのプラスの側面およびマイナスの側面について回答してもらい、労働を始める前と後で学業、行動、健康について変化があったかどうかを回答してもらった。そのような児童の変化が、子どもを労働させる要因になっているかどうかについても確認した。学校教員に対しては、保護者と同様に子どもが労働をすることのプラスの側面およびマイナスの側面について回答してもらい、労働児童と非労働児童でふるまいや健康状態に差があるか、また労働が子どもの中退・留年に影響しているかどうかについて質問した。



## ■ 調査結果

### 1. 働く子どもの QOL

全児童は男子が 58 名、女子が 24 名であった。そのうち 7 歳が 1 名、8 歳が 2 名、9 歳が 12 名、10 歳が 21 名、11 歳が 22 名、12 歳が 23 名、13 歳が 1 名であり、平均年齢は 10.6 歳となった。地区別に見ると、カラフナン地区のデータは男子 30 名、女子 12 名で、平均年齢は 10.2 歳となった。オトン町のデータは 40 名のうち、男子が 28 名、女子が 12 名で、平均年齢は 11.1 歳となった。

各地区の子どもの QOL をまとめたものが、表 1 と表 2 である。二地区を比較すると QOL 総得点はカラフナン地区のほうが高い。各項目では、「家族」の項目以外はすべてカラフナン地区のほうが高くなっていることがわかる。男女別に比較すると、カラフナン地区では、男子のほうが高いのが、「身体的健康」、「情緒的健康」、「学校生活」であり、女子のほうが

高いのが「QOL 総得点」、「自尊感情」、「家族」、「友だち」であった。オトン町では、男子のほうが高いのが「自尊感情」、「家族」のみであり、「QOL 総得点」、「身体的健康」、「情緒的健康」、「友だち」、「学校生活」は女子のほうが上回っていた。「QOL 総得点」と「友だち」の項目において女子の数値が男子の数値より高いという傾向は共通しているが、そのほかは共通している項目は見られなかった。

表1：カラフナン地区における働く子どもの QOL

	身体的健康	情緒的健康	自尊感情	家族	友だち	学校生活	QOL 得点
全体	2.87	3.16	2.31	2.74	2.83	2.49	2.73
男子	2.88	3.17	2.21	2.72	2.80	2.50	2.71
女子	2.85	3.15	2.54	2.79	2.92	2.48	2.79

表2：オトン町における働く子どもの QOL

	身体的健康	情緒的健康	自尊感情	家族	友だち	学校生活	QOL 得点
全体	2.75	3.09	2.25	2.86	2.75	2.34	2.68
男子	2.71	3.04	2.26	2.91	2.67	2.30	2.66
女子	2.85	3.19	2.23	2.73	2.94	2.41	2.73

次に、QOL の各項目と労働に関する項目にどのような関係が見られるのか検討した。QOL 下位領域である「身体的健康」「情緒的健康」「自尊感情」「家族」「友だち」「学校生活」のそれぞれの項目と、「身体的重労働の頻度」「労働時間」「労働日数」「家事手伝いの頻度」の関係を回帰分析によって検討した。

身体的健康については、カラフナン地区では労働時間が長い児童ほど病気だと感じる児童が少なく、頭痛や腹痛があった児童も少ないことがわかった。一方オトン町では、身体的重労働に従事している児童ほど、自分は強くてエネルギーがあると感じていると回答している児童が多いことがわかった。両地域とも、労働をよくしている児童ほど身体的に健康であるという点は共通している。しかしながら、カラフナンでは労働時間の長さが、オトン町では身体的重労働に従事する頻度というように、労働の異なる要素が児童の身体的健康と強く関係していることが明らかになった。

情緒的健康については、カラフナン地区では労働時間が長い児童は楽しいと感じたりよく笑ったりすることが少ないと感じているにも関わらず、家事手伝いをしている児童はそ

の逆で楽しいと感じたりよく笑ったりすることが多いと感じていることがわかった。一方オトン町では、働いている日数が多い児童ほど怖い思いをした経験が少ないことが確認された。総じて、カラフナン地区とオトン町の労働と情緒的健康の関係は異なっているということがいえよう。

自尊心については、カラフナン地区では労働日数が多い児童ほど良いアイデアを思いついたと考える児童が多く、また家事手伝いの頻度が多い児童ほど世界の頂点に立っているような気分になる頻度が高いことがわかった。一方オトン町では、自尊心については労働のいずれの項目の間にも有意な相関関係は見られなかった。すなわち、カラフナン地区ではよく働いている児童ほど自尊心が高いといえるが、オトン町ではそのような傾向はない。したがって労働と自尊心の関係は労働の種類によって違いがあることが確認できる。

家族の項目については、カラフナン地区では家事手伝いをよくする児童ほど、両親が自分に特定の物事をやめさせる傾向があると感じる児童が少ないことがわかった。しかしオトン町では逆に、家事手伝いをよくする児童ほど、両親が自分に特定の物事をやめさせる傾向があると感じる児童が多いことがわかった。すなわち、両地区のあいだには労働児童の家族との関係性や児童の家事手伝いへの取り組み方に違いがあることが推察できる。

次に、労働の各項目と友だちの関係に着目する。カラフナン地区では、身体的重労働に従事している児童ほど他の児童が自分のことを好きだと感じていないことがわかった。一方オトン町では、働いている日数が多い児童ほど、他の子どもが自分のことを好きだと感じている児童が少ないことを意味している。したがって、関係する労働の要素は異なるものの、両地域とも労働をよくする児童ほど友人関係がうまくいっていないことが明らかとなった。

学校生活については、カラフナン地区のほうが若干強い関係が見られたが、両方の地区で家事手伝いをよくする児童が毎日を楽しみに感じていることがわかった。また、オトン町では働いている時間の長い児童ほど悪い成績がつくのを心配するという傾向も見られたが、この傾向はカラフナン地区にはなく、オトン町の労働児童のみに見られた結果だということがわかった。

## 2. 保護者へのインタビュー

### 2-1. カラフナン地区の調査結果

#### (1) 子どもの労働のプラスの側面とマイナスの側面

カラフナン地区の調査では、子どもの労働におけるプラスの側面は何かという問いに対して、7名の保護者のうち6名が家計への貢献を挙げた。家計への貢献に加えて、子ども自身が自分のお小遣いを稼げることを挙げた保護者もいた。しかし、経済的な貢献をプラスの側面として認めながらも、保護者 M.M のように、実際は学校に通うことを望んでいる保護者もいる。彼女の家庭では、働いている2名の児童はすでに学校には通っていない。

「私は、子どもには学校に行ってほしいと思っています。でも子どもたちが学校に行かず  
に働きたいと言っているのです。唯一良い点があるとすれば、家計に貢献してくれること  
ですが、それも少量なので十分ではありません。」(保護者 M.M・41 歳)

また、きょうだい为学校に行くことを助けていること、と回答した保護者もいた。しか  
し同じようにきょうだいの学業継続のために労働をしても、その労働をプラスと捉え  
るのかマイナスと捉えるのかは意見が分かれていることがわかった。

ほかの保護者も同様に、成績だけでなく出席・宿題などを含めた学業面や、さらには教  
育機会の獲得に対する悪影響を労働のマイナスの側面として指摘した。保護者 L の回答は、  
労働が出席率・成績・宿題に複合的に悪影響を及ぼしていることを物語っている。また、  
事故などの危険があることについて回答している親もいた。

「彼らは働いているために、学校に行くことができません。彼らの成績は低いです。なぜ  
なら、授業を休んでいるからです。テストのできもよくありません。宿題を尋ねたときも、  
彼らは説明することができません。なぜなら、彼らはほとんどの時間をごみ山で過ごし  
ているからです。子どもたちは1週間のうち5日間働いて、2日間学校に行っています。」(保  
護者 L・36 歳)

## (2) 労働による子どもの変化

次に、労働を始める前と後で学業面にどのような変化が見られたかを尋ねたが、すべ  
ての回答がマイナスの変化についてであった。一方で、放課後にのみ労働をしており出席  
には影響のない児童もいた。さらに、学校を中退してから労働を始めたという児童もいた。  
このように労働することそのものが教育達成を直接的には阻害していないケースも見られ  
た。

行動の変化については、2名が労働をすることが喫煙につながったと回答した。ある児  
童はごみ山のおいが嫌なので、その対策としてごみ山でたばこを吸い始めたのだという。  
また、労働によって自由に使えるお小遣いが増えることも、たばこを買うことを可能にし  
ていた。喫煙を始めることによる身体への悪影響もすでに保護者に認識されていることが  
わかった。その一方で、労働をすることによって責任感が増したというように、プラスの  
変化についての回答も見られた。健康状態については、病気にかかった・かかりやすくな  
ったという変化が回答された。保護者の回答からは子どもがかかる病気の深刻さが伺えた。

## (3) 子どもが労働をする背景

これまでに回答された労働の肯定的・否定的な側面や労働の開始後に見られた変化を踏  
まえて、子どもに労働をさせたいと思うかどうか尋ねた。すると、カラフナン地区では保  
護者全員が、本当は子どもを労働させたくはないと答えた。しかし、子ども自身が働くこ

とを切望しているのだという。

子どもが働くことを望む理由には、子どもも自分で使えるお金や自由がほしいこと、また単純に学校に行かずに遊びたいという点があるようだ。実際にごみ山に行っても働かずにただ遊んでいるだけのときもあるという。一方で、父親が病気になるため子どもが働かなければ経済的にやっていけないというように、極度の貧困状態にある家庭も見られた。

総じて、カラフナン地区では、保護者自身は子どもの労働に対して否定的であるが、子ども自身の意志に加えて、家計にも少なからず貢献していることが、子どもが労働を継続する要因になっているといえる。

## 2-2. オトン町の調査結果

### (1) 子どもの労働のプラスの側面とマイナスの側面

オトン町の調査では、子どもの労働のプラスの側面として、子どもに家族を助けたいという意志があること、よく働くようになったこと、農家の仕事に精通できるようになること、という回答が見られた。家族を助けたいという意志や勤勉さなど、児童の精神面に關する肯定的な回答はカラフナン地区では見られなかった。同様に、農家の仕事に精通することというような、子どもの仕事を技術や生きる力を獲得する機会と捉えている回答もカラフナン地区では見られなかった。

一方でマイナスの側面は何かという問いに対しては、多様な側面からの回答が得られた。主に収入が不十分で子どもの労働に頼らなければならない点、幼い子どもの身体や学業への悪影響が指摘された。こうした側面に対する回答はカラフナン地区の結果と共通している。しかしながら、労働によって学校に通えていないなど、教育へのアクセスに対する弊害については回答されなかった。これは、オトン町でアンケートに回答してくれた保護者の労働児童全員が、現在は学校に通うことができているからだと推察する。

一方でオトン町の回答だけに見られた特徴もある。一部の保護者によっては、子ども時代を謳歌できないこと、子どもの労働が保護者自身の悪いイメージにつながるものが指摘されている。このような側面についてはカラフナン地区では回答されていなかった。

### (2) 労働による子どもの変化

労働を始める前と後での変化については、学業面では、出席数の低下を5名が回答した。保護者の回答から農家の仕事が忙しくなる田植え期と収穫期に子どもが学校を休む確率はより高くなることが確認された。成績と宿題についても同じように悪い影響がある児童もいる一方で、影響を受けていない児童もいるようである。

行動の変化については、カラフナン地区と同様に責任感が増したという回答が見られた。保護者 S はその具体的な例として、服を洗ったり、皿を洗ったり、鳥や牛にえさをやったり、野菜を植えたりなどするようになったことを挙げた。一方マイナスの変化としては、以下の保護者 M.R と保護者 Y の発言にあるように、親に対して言い返すことが多くなった

ということが挙げられた。これはカラフナン地区では見られなかった変化であった。

「態度が変わりました。前は親の言うことを聞いていましたが、言い返すことが多くなりました。」(保護者 M.R・35 歳)

「私に向かって口答えするようになりました。収穫の時期だけ、私は彼に農家での仕事を手伝うように言います。もし彼がいやだといったら、それなら学校に行きなさいと言います。彼は学校にも行きたくないし、働きたくもありません。私は収穫の時期だけは、息子に学校を休んでほしいと考えています」(保護者 Y・36 歳)

健康状態に関しては、インフルエンザにかかること、疲れていることという回答が、1名ずつあっただけで、ほとんどの保護者が変化はなかったと回答した。

### (3) 子どもが労働をする背景

オトン町でもカラフナン地区と同様に、労働の肯定的・否定的な側面や労働開始後子どもに現れた変化を踏まえて、子どもに労働をさせたいと思うかどうかを尋ねた。オトン町では、3名が子どもには働いてほしいと思うと回答した。成績や出席に深刻な影響が出ない限りあるいは学校と労働を両立できる限りということではあるが、子どもに農家を手伝ってほしいという保護者自身の期待が述べられた。前述の保護者 Y の回答にもあるように、収穫期は学校を休んで仕事を手伝ってほしいと話す親もいた。

さらに、保護者 S は子どもの成長という観点において、肯定的に労働の価値を認めている。

「いつか彼らは他の場所に行ったら、自分で自分の人生を築かなくてはなりません。それに、子どもたちは労働をすることを楽しんでます。もしネガティブな変化が見られたら、私は労働を止めてほしいと考えています。なぜなら、私が子どもを働かせる理由の一つは、彼らが自身の家族を持ったときにより責任感のある人物になると考えるからです。ですが、実際にいまは否定的な側面は認識していません。」(保護者 S・43 歳)

彼女は同様に、「息子が成長したときに、より責任感のある人物になるために、私は息子をトレーニングしているのです。」とも述べている。すなわち、労働によってより責任感を持った人間になれると考えており、それが彼女の子どもたちを労働させる理由にもなっている。以上の保護者たちのように子どもに労働することを保護者自身が望んでいることを示す回答は、カラフナン地区では見られなかった。



### 3. 小学校教員へのインタビュー

#### 3-1. カラフナン地区の調査結果

はじめに、カラフナン地区の小学校の調査結果について述べる。子どもの労働におけるプラスの側面は何かという問いに対して、子どもが保護され子ども時代を謳歌する権利を持っていることや、法的な側面からも児童労働は認められていないことを主張した教員もいた。その一方で、教員 J.P は他の児童に比べて交渉に長けていることや自立していることをプラスの側面として回答した。学習面でも他の児童より優位な側面があることを指摘している。

「自立心があります。自分で自分の必要なものを満たせる力を持っているからです。また自分の生き方がはっきりしていると思います。お金があることによって満足感を得られます。また他の子と関わったり交渉することが得意だと感じています（例えば、ペン貸して、紙貸してと他のクラスに行って借りに行ったり）。算数や体育が得意です。算数はお金を稼いでいるのでお金など数を数えるのが得意だということです。」（教員 J.P・男性）

また、マイナスの側面は何かという問いに対しては授業の欠席や学習の遅れが挙げられた。どの児童が働いているか知っているかという問いに対してはこの学校に来てまだ2週間という教員 K 以外は認識していた。認識している2人の教員に、働いている子どもとそうでない子どもに違いは見られるか、またそれはどのような違いかを尋ねたところ、労働によって授業を欠席することが、成績の低下やいじめを招いていることがわかった。それがクラスへの居にくさにつながり、それがまた学校への意欲を削ぐ原因となっているのである。

健康状態については、両方の教員が、労働児童が非労働児童に比べてより不健康であることを認識している。具体的には、低体重であること、鼻水を垂らしている子が多いこと、ごみ山で食べ残しを食べることがあるため腹痛を訴えることがあることが挙げられた。

低体重の子が多いこともあって、この学校では給食プログラムが毎日実施されている。子ども全員ではなく、その一部の貧しい子どもに対して学校側が選んで提供しているという。その効果について尋ねたところ、良い影響がある児童もいるが依然学校に来ることに関心を示さないものもいるという。

また、1年間に何人の児童が中退あるいは停学しているか、という問いに対して、教員 K のクラスでは2人、教員 J.T のクラスでは0人、教員 J.P のクラスでは1人がすでに中退していた。教員 J.P は中退した生徒について以下のように話している。

「1人の男子が中退してしまいました。彼は学校に来て勉強をすることよりも労働することを選んだのです。彼の両親は私に言いました。彼は学校で他の同級生をいじめていたり学校を抜け出そうとしており、言っても聞かないので罰として学校を中退させた。労働

をさせることで、厳しい現状を分からせるそうです。」(教員 J.P・男性)

教員 J.P は家庭に行き学校に通うことを説得したが、子どもの意志が働くことだったのだと話す。別の2名の教員も労働が中退や停学に影響していると思うか、という問いに対しては、はいと回答した。

### 3-2. オトン町の調査結果

次にオトン町の小学校でおこなった教員へのインタビュー結果について述べる。オトン町の小学校では3人の教員が話し合いながら、回答をまとめて話してくれた。まず、子どもの労働におけるプラスの側面は何かという問いに対して、「彼らが両親を経済的に支えられること。」と回答した。一方、マイナスの側面は何かという問いに対しては以下のように回答している。学業面への悪影響が、精神面への悪影響につながっていることが指摘されている。

「いつも学校を休むこと。それが、成績にも影響を与えていること。彼らの自尊心にも影響を与えています。彼らが授業を休むと、クラスメートからよくいじめられます。それで、自信をなくしていきます。彼らは授業中も質問に答えることができません。」

また、教員たちはクラスでどの児童が働いているか把握していたが、労働をしている児童は多くなく、あるクラスでは児童20名のうち労働している児童は6名ということであった。教師自身も子どもたちと同じコミュニティに住んでいるため、地域のことはよく知っているのだという。

働いている子どもとそうでない子どもに違いは見られるか、またそれはどのような違いかを尋ねたところ、行動の違いについては以下のような回答が得られた。オトン町では、労働によって子どもたちが責任感を身につけていることが、保護者だけでなく小学校教員によっても認識されていることがわかった。一方健康状態についても、差異が見られると回答した。労働児童はまず仕事を終えなければならないので、時間通りに食事をとれないのだと話してくれた。

次に1年間に何人の児童が中退や停学をするか尋ねたところ、ほとんどの子どもは中退せず1～2名程度であり、理由も他の場所への引越しや病気などだという。労働は中退・停学の直接的な要因とは見なされていないようである。さらに、以下のように労働児童に対する配慮についても話した。教師たちも児童が労働するのは親の期待と要望があるからだと捉えているようである。

「教師たちは生徒の状況を理解しており、それを考慮しています。1日や2日の欠席は許すこともあります。しかし、成績が悪ければ、それを許すことはしません。」

「子どもの親たちが農家を手伝ってほしいと感じていたり、幼い子どもの面倒を見てほしいと感じているのです。一方で子どもたちは学校に行きたいと感じています。」

また、教員らも子どもたちがお金を稼いでいるのは田植え期と収穫期だけであると話し、保護者の回答と一致した。また、オトン町の小学校でも同様に給食プログラム（feeding program）は実施していることがわかった。

#### ■本調査から得られた考察

労働児童を対象にした QOL 調査からは、児童労働が QOL に与えている影響は様ではなく、地域や労働の種類によって異なっていることが示された。また、労働が重労働であることや労働の頻度が高いことなどが、主観的な生活の質に必ずしもマイナスの影響を与えるわけではないということがわかった。たとえば今回調査対象となった地域および労働の種類においては、よく労働をする児童ほど身体的に健康であることが明らかとなった。また家事手伝いをよくする児童ほど学校生活の質が高いことも、両地区に共通する傾向として確認された。

しかしながら、一方で労働をよくする児童ほど友だち関係の質が良くないことも、両地区に共通する結果として、QOL 調査から明らかとなった。両地区の学校教員のインタビューからも、労働児童の出席率の低下や学業への悪影響がいじめや疎外感を生み出し、学級のなかで居場所をなくすことにつながっていることが指摘されており、その悪影響は客観的にも認められていることがわかる。一方でオトン町のケースでは保護者も教員も労働が中退や停学の直接的な理由とはなっていないと捉えられているようであるが、それによって労働が間接的に与えている悪影響が軽視されてしまうことが危惧される。在学している労働児童が学びやすく快適な学校生活を送れるように、学校全体・教員同士で取り組んでいく必要がある。

同様に、労働が児童の身体に与えている悪影響も深刻である。特に労働環境の劣悪さによって事故に遭ったり病気にかかりやすくなることなどが指摘されている。さらに、保護者からも学校教員からも、子どもが労働によって安全な場所で子どもらしく遊ばず、子ども期を十分に謳歌できていないことが示唆されている。健全な子どもたちの発育のためには、やはり労働がもたらす弊害を家庭・学校・地域が適切に認識し、そういった悪影響から保護されることが重要である。

また、保護者のインタビューからは、地区によって労働の認識が異なっていることがわかった。カラファン地区では保護者は労働をすることを望んでおらず、学校に通ってほしいと感じているが、子どもを労働させなければやっていけない経済的困難や子どもの働きたいという意志によって、子どもが労働に従事していることがわかった。一方オトン町では、保護者自身が子どもが働くことを望んでいるケースも見られた。労働を将来自立してやっていくためのトレーニングとして、子どもの成長にプラスなものと捉えている保護者

もいた。

児童労働が子どもの発達に与える影響は複雑である。しかし、どちらの地域でも学業面および健康面での悪影響が指摘されたことは間違いない。今回対象にした児童たちは初等教育段階の学齢期であり、基礎教育の適切な普及によって個人の能力強化が図られるべきである。よって、家計に対する経済的な支援や各学校で行われていたような給食プログラムなど就学支援と同時に、保護者に対して教育の価値を理解してもらうような啓発活動を通して、すべての児童が保護され教育を受ける機会を保障されるべきだと考える。

#### ■今後の研究への展望

今回の調査では、労働児童を対象にした QOL 調査と保護者・教員へのインタビューを行った。QOL 調査の分析では地区別の特徴を確認することができたが、何が QOL の違いをもたらす要因となっているのかまでは詳細な検討に至らなかった。今回収集できたデータから得られる変数には限りがあるが、年齢や性別また家庭の経済水準などによって違いが出るのかどうかこれから確認していきたい。

さらに、今回調査対象としたのは労働児童のみである。労働児童間での検討であるために、労働の程度や頻度が高いほうが QOL には肯定的な影響が出たものと考えられる。しかしながら、非労働児童の QOL 値と比較した場合、どのような結果になるだろうか。それでも、労働の程度や頻度の高い労働児童のほうが高い QOL 値を示すだろうか。労働児童と非労働児童の QOL を比較することによって、複雑な労働の影響をより詳細に捉え検討することが可能になるだろう。

また、今回は保護者と教員へのインタビューから子どもが労働を開始する背景を追った。しかし、子ども自身はどのような気持ちで労働を開始しているのだろうか。カラフナン地区では子どもは労働することを切望しているということであるが、その最たる動機はいったい何だろうか。家計に貢献したいという強い気持ちなのか、学校へ通いたくないからか、仕事が楽しいからなのか。同様に、教育を継続しない・できない理由を子どもの言葉で捉えることも必要だと感じている。

#### ■本制度への要望

特にありません。